女性室広報誌

あいあう

26 2015 APRIL

［寄稿］「多様な性」を認め合える社会へ

遠藤まめた ——2

テーマ：レインボー

報告1 女性住職懇談会 6

報告2 大阪教区女性住職の集い 7

レポート ＤＶシェルター訪問レポート 8

報告3 奥羽教区の取り組み 10

報告4 大垣教区の取り組み 12

かがやき 命の瀬戸際で 小丸洋子 14

ゆらぎ 鯉のぼり 金石潤導 15

寄稿

「多様な性」を認め合える社会へ

遠藤（えんどう）まめた

「赤ちゃんの性別は男の子？それとも女の子？」。私たちは、この世に誕生した瞬間から、そう尋ねられます。選択肢は二つだけ。そして「女の子（もしくは男の子）ですよ」となれば、周りからはその性別で扱われるようになり、私たちの人生がスタートします。

先日、友人のもとに赤ちゃんが生まれたときのことです。その赤ちゃんが「男の子」だとわかった途端、周囲の大人たちは口ぐちに「かっこいいね」「これは将来イケメンになるね」「女の子を泣かせちゃだめだぞ」などと話しはじめました。生まれたばかりの赤ちゃんはひとことも話せないのに、「男の子」というだけで、みんな随分と好き勝手なことを言っています。赤ちゃんにどんな服やおもちゃを買ってあげようか、どんな遊びが好きだろうか、将来はどんなふうに育つのか……周囲の大人たちは赤ちゃんを抱きあげながらいろいろと想像をめぐらせますが、その「想像の世界」は、赤ちゃんが「男の子だ」ということで、どうやら一定の方向に限定されてしまったようでした。

この話は、赤ちゃんの将来をあれこれ想像するだけならば、一見ほほえましいことかもしれません。しかし立ち止まって考えてみると、赤ちゃんが「男の子」というだけであれやこれやと想像をする大人たちは、「男の子」についてのステレオタイプ（決めつけ）に惑わされて、目の前にいる赤ちゃんの姿が本当には見えていないのかもしれません。この子が少し大きくなって、サッカーよりも人形遊びを好むようになったとしても、大人たちはその事実が「見えない」かもしれません。

さらに子どもが成長して「自分はどうやら、他の男の子たちとはどこかが違うな」「男らしくするのがイヤだな」などと思い悩む日が来たとしても、ステレオタイプに惑わされている人には、その子の本当の姿は「見えない」でしょう。

人間は、女性と男性の二種類のみに単純に分類できるのではなく、それぞれが繊細（せんさい）で複雑な部分をもっています。性別のステレオタイプに縛られていると、本来は見えるはずの「丸ごとの人間」が目に映らなくなってしまいます。

私たちは相手の言葉に耳を傾けることなく、「この人は男性だから」「女性ならこうだろう」と勝手に想像してしまうことがあります。そのことで、目の前にある相手の姿が、実のところまったく見えなくなってしまう、あるいは他でもない自分自身の生き方さえも狭めてしまうことがあるのではないかと思います。性とはどのようなものなのかを改めて考え、身につけてしまったステレオタイプを解きほぐすことは、一人ひとりが自分らしく生きて

1987年生まれ。トランスジェンダー当事者としての自らの体験をもとに10代後半よりLGBT（セクシュアル・マイノリティ）をテーマに啓発活動をはじめる。主にLGBTの子ども・若者の「生きづらさ」や教育現場における支援や自殺防止に関わる。「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」共同代表。共著『思春期サバイバル　10代の時って考えることが多くなる気がするわけ。』（はるか書房・2013年）
ホームページ　http://www.endomameta.com/

いくうえで重要なことです。その中でも、特にセクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の人たちが「見えなく」させられている社会について、本稿では皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

「心と体の性が一致しない」ということ

これを書いている私は、セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の当事者のひとりです。生まれたときには「女の子」でしたが、幼い頃から「男の子」のように振る舞うことのほうが自然だと感じていました。

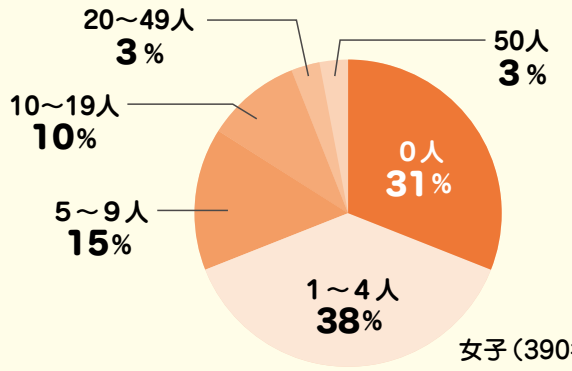
幼稚園のお遊戯会で「オズの魔法使い」の劇をやることになったときのこと。私はライオンやロボットの役がかっこいいなと思ったのですが、先生には「その役は男の子用だからダメだよ」と言われて、「どうして自分にはダメなんだろう」と思った経験が、性別に関する疑問を持った最初の出来事のひとつでした。やがて小学校に入ると赤いランドセルや絵の具セットを持つことに抵抗を感じ、両親が買ってくれたスカートをはいて登校することを、とても恥ずかしいと思うようになりました。

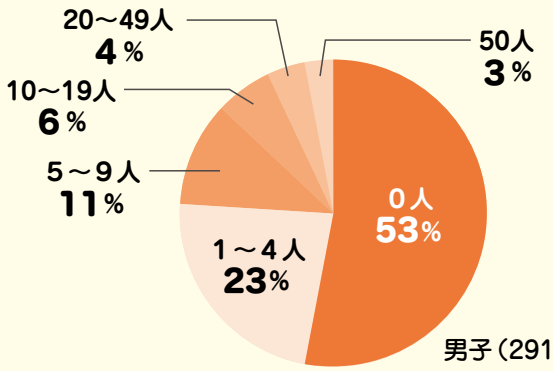
サッカーや恐竜が好きで、男の子の集団にいるほうが好き。足を閉じて座るのが嫌いで、スカートが嫌い。子どもの頃の私は、一見よくいる「ボーイッシュな女の子」のようでしたが、一方で「ボーイッシュ」では説明がつかないような感覚もどこかに持っていました。「女の子なんだから」「あなたは女子」などと言われると、「そもそも自分は女の子なの？本当に？」という疑問がわいてくるのです。自分が女子のグループに入れられていることは、頭では理解しています。でも、感覚が全くついていかないのです。小学校高学年、修学旅行の部屋割りで「女子」の部屋に入れられた時はとても居心地が悪くて、同級生と一緒に女湯に入るように言われても、恥ずかしくてそんなことできるもんかと思いました。

やがて思春期が訪れ、女性としての二次性徴がやってくるようになると「自分の体に起きていることは間違いだ」と感じるようになります。胸が膨らみはじめたときは、頭を殴られたようなショックを受けました。「そもそも自分は本当に女の子なんだろうか？」という、あまりに根源的な疑問

カミングアウトの実態

小学生から高校生の間に自分がLGBTであることを話した人数（当時）





◆LGBT当事者の多くは、高校生までに自身の性のあり方について自覚するものの、「誰にも打ち明けていない」が男子５割、女子３割。「誰かに話した」としても大半は数人程度、10人以上に話せたのは回答者の２割にも満たない。

◆誰かに打ち明けた生徒の場合、カミングアウトの相手に選んだのは「同級生」が７割、教師や親などの「周囲の大人」を選んだのは１～２割程度。「ごく親しい親友数人にはものすごく頑張って話すことはできるかもしれないが、大人には言わない」という姿が浮かび上がる。

◆このような傾向があると、大人からは当事者の子どもたちの姿が見えにくく、「LGBTの子どもは身近にいない」という大人たちの誤解が強化されやすくなる。誰が当事者なのかを大人たちが把握できない中で、子どもたち同士の間で、カミングアウトやいじめ加害・被害が起きている現状が想定される。

『LGBTの子どもも安心できる学校づくりへ―「LGBT学校生活実態調査2013」レポート』より抜粋し転載しています。
（調査の全文はhttp://endomameta.com/schoolreport.pdfからダウンロードできます。）

を持ってしまう自分……。しかしそんなことは他人には言えず、性別について考え始めると頭の中がグルグルと混乱してしまいます。この悩みについて、役立ちそうな情報は学校では教えてもらえず、自分が何について悩んでいるのかを言葉にして考えることさえできませんでした。

高校生になり、我が家にインターネットがつながるようになって、そこで初めて私はセクシュアル・マイノリティという概念を知りました。世間ではよく「人間は男と女の二種類しかいない」などといった表現が飛び交っていますが、実際には人間の性のあり方は一人ひとり違っていること、性には多様なあり方があるらしいということを、初めて知ったのです。このときようやく「あぁ、自分は心と体の性別が一致していない状態なんだな。でも、好きなほうの性別で生きていけばいいんだな」と、自分の状況について納得することができました。

性別についての私の悩みや苦労はその後もずっと続くのですが、「自分が何者なのか」という問いに対して、ようやく答えが見つかったときには本当にホッとしたことを憶えています。それは「自分は、このままで生きていけるんだ」という光のようなものが見えた瞬間でした。

性のありようは多様

私の場合は、心と体の性別が一致しない（生物学的には女性だが、自分のことを男性として捉えている）タイプのセクシュアル・マイノリティ当事者ですが、ひとくちにセクシュアル・マイノリティといっても、いろいろなタイプの人たちがいます。

私のように「自分は本当に女（男）なのか」と、自分の出生時の性別について疑問や違和感を持つタイプの人は、トランスジェンダーと呼ばれます。医学的な枠組みで、トランスジェンダーの人々が性同一性障害と表されることもあります。トランスジェンダーの人々は、自分の希望する性別で生きることを望み、服装や外見上の性別を変えようとしたり、ホルモン注射や性別適合手術（いわゆる性転換手術）を希望したりします。心の性は変えられなくても、外見を心に合わせることは可能です。トランスジェンダーの人々は数百人から数千人に一人程度の割合で存在していると言われています。

蔓延している「ホモネタ」

LGBT をネタとした冗談やからかいを見聞きした経験（複数回答可）

	性別違和のある男子	非異性愛男子	性別違和のある女子	非異性愛女子
何もしなかった	71%	68%	75%	87%
自分がいじめられないよう一緒になって笑った	17%	38%	25%	30%
やめてほしいと言った	16%	14%	13%	14%
親に相談した	0%	2%	1%	0%
学校の教師に相談した	3%	1%	1%	8%
他の友人や同級生に相談した	3%	2%	2%	2%

◆子どもたちを取り巻く環境に、いわゆる「ホモネタ」（LGBT をネタとした冗談やからかい）が蔓延していることも明らかになった。

◆「学校の友人や同級生が LGBT についての不快な冗談を言ったり、からかったりしたことがあったかどうか」尋ねると、回答者全体の84％が何らかの形でこれらを見聞きした経験がある。

◆「どのように対応したか」には、「やめてほしい」と言えたのはごく一部にすぎず、「何もしなかった」が７割強。「自分がいじめられないように一緒になって笑った」も、非異性愛男子では約４割にのぼる。これは、自分が LGBT でないことを証明するための「踏み絵」のようなつらい体験だと推測される。

『LGBT の子どもも安心できる学校づくりへ―「LGBT 学校生活実態調査2013」レポート』より抜粋し転載しています。
（調査の全文は http://endomameta.com/schoolreport.pdf からダウンロードできます。）

一方でセクシュアル・マイノリティの中には、恋愛対象が同性に向くタイプの人たちもいます。レズビアン、ゲイはそれぞれ女性と男性の同性愛者を指します。バイセクシュアルは同性・異性どちらにも惹かれる人々です。ある人が自然に異性に惹かれるように、別の人は自然と同性に惹かれます。ゲイやレズビアンの人は、努力をしても異性を好きにはなれませんが、これは異性愛者の人が、努力をしても同性愛者にはなれないのと同じことです。レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの人々は、人口の3～5％程度、実に30人に1人程度の割合で存在すると言われます。これは「左利き」の人と同じくらいの確率です。

昨今では、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーと、それぞれの言葉の頭文字を並べたLGBTという言葉が、セクシュアル・マイノリティとほぼ同じような意味で用いられることが増えています。

「見えなく」させられているもの

これまで長い間、LGBTの存在は誤解されてきました。同性愛や性同一性障害について話題にすると「あぁ、テレビに出てくる面白い人たちのことでしょう」という反応が返ってくることがあります。また「それは趣味でやっているんでしょう」と思っている人も多いようです。しかし、実際にはそうではありません。LGBTの人たちは、芸能界や水商売の世界にだけ存在しているのではなく、会社員やお医者さん、漁師、スポーツ選手、絵本作家、学校の先生など、ありとあらゆる職業についています。ただ、LGBTであることは本人が言わない限りはわからないので「見えなく」させられているのです。また、性のありようは個人の意思や選択で変えられるものではないのです。

あるゲイの友人は13歳のときに同性の先輩を好きになりましたが、同性が好きな自分自身のことを19歳になるまで受け入れられませんでした。大学に入るまで「そのままの自分でいていい」と言ってくれる人が、周りにだれもいなかったためです。周りの人たちは「LGBTは特別な人たちだ」「男なら女を好きになるものだ」というステレオタイプを持っていて、ときには同性愛者を笑い者にしていたので、彼はいつも不安でした。「本当のことは黙っていなくては」と、心の中はひとりぼっちでした。このように、ただただ「見えなく」させられている人たちが、みなさんの周りにも一人や二人はいるのかもしれません。近年、LGBTの人たちが自殺を考える割合が高いことがわかりました。ありのままの自分で、のびのびと暮らせない社会ゆえの息苦しさがここにはあります。親しい友人や家族にさえも、自分の性のありようを打ち明けることができない人が多いのです。

「人間は男と女の二種類だけ」ではなく、人はそれぞれ違っていて繊細であること。恋愛や人生を共にしたい相手が、異性ではなく同性の場合もあること――。これらの事実を踏まえてはじめて「見えてくる」のは身近な人の本当の姿かもしれません。また、自分らしく生きることや誰かを愛することの意味が改めて「見えてくる」かもしれません。ぜひ、周りの人に「性は多様なんだよ」と話をしてみてください。あなたが「見える」側の人になることで、ホッとする顔が身近にあるかもしれませんよ。

『思春期サバイバル
10代の時って考えることが多くなる気がするわけ。』
制作者＝ここから探検隊（遠藤まめた・金子由美子・武田明恵・渡辺大輔）
はるか書房　定価＝（本体1,400円＋税）　2013年発行

「10代はこんなこと考えているのか、まったく理解できない」。そう思っている「おとな」のあなた。自分自身の10代を思い出してみると…、そういえば、こんなことで悩んでいたなと思いませんか？
本書は、思春期の若者とさまざまな形で関わりをもっている「元若者たち」が執筆チームを組み作成されました。セクシュアリティの多様性ということを柱の一つにしつつも、思春期の若者が抱えるさまざまな思いや疑問に広がりをもたせた、新しいスタイルの本。「思春期にいるみなさんには、もうちょっと自由に、安心して悩みながら生きてほしい」とエールを送ります。

二〇一四年九月十六日

女性住職懇談会

女性室では、女性住職懇談会を宗務所で開催しました。

一九九一年の「寺院教会条例」一部改正により、限定的に宗門に女性の住職就任が認められることになりました。そのことは、女性室が設置された大きな要因の一つだと思います。現在、宗派では一三〇余名の女性が住職に就任しています。それでも比率にすると、男性に対して女性は1・7％にすぎません。

この現状から、多くの男性の中にあって、女性住職の声が充分に届いているとは思えません。そこで、住職として現場で活躍している女性たちの声を相互に聞くため、二〇一〇年二月に初めて「女性住職の集い」を開催しました。その後、計四回の「集い」に多くの方々が参加してくださいました。

同じ住職という任にあたっている女性たちに、できるだけ時間的制約のない、ゆったりとした環境の中で日ごろ抱えている思いを語り合っていただくため、あえて市内の旅館に会場を設けて「集い」という形で開催してきました。参加者からは、住職に就任したそれぞれの事情と寺院に関わる制度の問題や、儀式声明（しょうみょう）の場での苦労、門徒との関係など、女性ならではの視点からさまざまな声を聞くことができました。

今年度は一度立ち止まり、過去に「女性住職の集い」に参加された方、宗門の役職（宗議会議員・正副組長）に就かれている方に参集いただき、懇談会としました。会では「第一～四回『女性住職の集い』を振り返って」「女性住職の置かれている現状・現場での課題」「今後の『女性住職の集い』あり方について」という三点の議題を中心に語り合いました。特に、一九九一年に女性に住職就任の道が開かれてから二十三年が経ち、女性が住職に就任することであらためて見えてくる課題が提起されました。

参加者の声の一部を紹介します。

- 「女性住職」という名称に違和感を抱く。「女性」という冠をつけなくてもよいぐらいになればいいと思う。
- 「女性」と冠することは、住職就任を認められるまでの歴史があって、差別の中にいながら、女たち自らが開いてきたことを表しているのではないか。
- 教区の正副組長会に出席すると、男性住職から「大変だね、凄いね」と言われる。女性だからそういう言葉が出たのかと、就任当初は気になることが多くあった。
- 「女性住職の集い」に参加して、同じ思いの方がいることが心強かった。教区の教化委員会に女性が増えたものの発言はまだ少ない。この温度差を埋めていかなければいけない。
- 女性だけの出仕、女性だけでやっていては変わらない、男女ともにお勤めすることがこうであると伝えてほしい。声明を教えてくださる女性の先生がもっと増えてほしい。
- 坊守が住職になるためにはクリアしなければならないことがある。条例で「卑属系統」が基本になっていることが問題。
- 女性が住職を継職するときは、男性が継職するときよりも「世襲」「家」の問題が明らかになってくる。
- 寺と門徒の関係が薄れていく状況下で、私の後、住職継承がどうなるのか、寺をどう維持していくのかが不安。
- 寺が聞法道場であれば誰が住職をやってもいい、門徒と関係を築ける人が継承すればいいと思う。
- 現場の悩みや課題の受け皿として、「集い」を続けてほしい。一人ひとりの上に、援助・助言・手助けが必要。まだ見えていない課題がある。
- 私が就任したころには、「女性住職の集い」が開催されていなかった。就任当初に「集い」を開いてもらいたかった。最初に同じ立場の人と会いたかった。

「男女両性で形づくる教団」をめざすには、女性住職の現場の声や意見が重要であることは言を俟（ま）たないことです。寺院を継承することの意義とは何か、男女ともに勤める声明作法とは何か、女性が尻込みしなくても発言できる宗門とは何か、課題は山積しています。女性室では、今後も少しでも不安を和らげ、お互いに交流していける場として「女性住職の集い」を開いていけるよう取り組みを進めていきます。

2015年2月6日
大阪・難波別院本堂地下研修ホール「南和室」

大阪教区女性住職の集い

大阪教区では「ちょっと聞いてぇちょっと教えてぇ」をテーマに、二〇一三年から毎年「大阪教区女性住職の集い」を開催してきました。これは本山で行われてきた『女性住職の集い』に参加した人からの「教区内でもぜひ同じような集いを持ちたい」という声を受けて、教区教化委員会「男女の平等参画を考える実行委員会」が開いたものです。

まだまだ男性中心の宗門の中にあって、住職に就いた女性たちが日々の生活の中で直面したさまざまな疑問や問題について、相談や情報の共有ができる「集いの場」をめざしています。実行委員会の呼びかけに、住職に限らず代務者や女性の僧侶など、関心のある方が参加しました。

二〇一三年の第一回目は、岩佐幾代さん（高山教区）を講師にお迎えし、先輩住職として就任当時のことや現在にいたるまでの経緯などをお話しいただきました。翌年の第二回目は、中川和子女性室スタッフをはじめ、参加者がさまざまな立場からお寺の現状や今後の課題について語り合い、交流を深めてきました。

三回目となる今年度は、速水馨宗務所企画室長に「『お寺のカタチ』～お寺の様々な取り組み～」を講題にお話いただきました。講義では、さまざまな宗派の寺院の活動事例をあげ、今後のお寺のあり方について、人々が求めていることを聞いていく姿勢や、具体的なこととして、受けとる側の視点に立った呼びかけチラシの作成など新しい発想が必要であると提示されました。

講義後、講師と参加者10名、実行委員8名、女性室スタッフ1名で話し合いの場を持ち、各寺院が抱えている多種多様な事情や問題について、それぞれの取り組みや意見を出し合いました。

教区、組、近隣寺院でこそ何かができるのではないか――。誰もが気やすく話し合える場として、今後も「集い」を開いていきたいと思います。

参加者の声

- 寺院継承のため入寺後、住職となって一からスタートしたので、まだ何もわからない。
- 代務者であるが、実務的には住職とも坊守とも、どっちともつかない立場である。
- 寺院には地域とのかかわり等、コミュニティーが大事だと感じた。女性住職、男性住職という性別を超えて話し合っていかなければいけない時期にきていると思う。
- 真宗の寺院としての活動に苦戦している。「御守り」を求められる等、対処に困ることがよくある。真宗の教えを伝えていく手立てとして、講義で紹介された落語法話は参考になった。親鸞聖人の教えを伝えてつなげていきたい。
- いろいろな活動はしたいが、お寺に人手が足りない。住職一人で坊守もいない。すべての仕事を一人でしなければいけないので余裕がないという厳しい現状がある。
- 夫が他所で勤めているので一人で法務をこなすだけの毎日。やっと門徒さんの顔がわかってきたという状態。ご門徒とのつながりを大切にしていきたい。現実に寺をやっていくことはエネルギーがいる。
- 子育て中なので寺を開いていく活動まではなかなか大変だが、講義を聞いていて、できそうなこともあると思った。

DVシェルター訪問レポート

社会福祉法人母子生活支援施設　本願寺ウィスタリアガーデン

女性室ではＤＶ（ドメスティック・バイオレンス※1）被害の女性の現状を学ぶために、浄土真宗本願寺派（西本願寺）の関係施設である「本願寺ウィスタリアガーデン」を訪ねました。本願寺ウィスタリアガーデンとは、元々は西本願寺が戦争で家や配偶者を失った人のために開設した母子寮に始まり、現在は社会福祉法人の母子生活支援施設となっています。施設長さんと母子支援員の方からお話を伺いました。

こちらにはＤＶ被害者の女性が入所されているそうですが、入られている方の状況についてお聞かせください。

母子生活支援施設は、児童福祉法第三十八条の規定に基づき、「配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童を入所させて、これらの者を保護するとともに、これらの者の自立の促進のためにその生活を支援」することを目的とする施設で、本願寺ウィスタリアガーデンには、現在20世帯約50人が入所しています。

それらの多くは、ＤＶ被害によって多くの困難や経済・生活や子育てに大きな不安を抱えて避難してきた母子です。

ここでは、母子が安心・安全に生活できるよう、居室は個室（２ＤＫトイレ・バス付き）で自炊し食事もできるようになっています。

また、それぞれの抱えている課題に応じて、自立支援計画を立てますが、生活保護費、児童手当などの申請や、ハローワーク、病院の付き添い、保育所、学校の手続きなど生活の安定に向け支援を始めます。

この施設は、西本願寺の関係施設ですから、仏間もあります。週一回（火曜日午後七時半）の仏参（お参りと法話）は、いのちを見つめる時間や、入所者同士の交流の場となっています。ほとんどの母子が集いますが、信教の自由は保障しています。

その他、報恩講やファミリーコンサートなどの催しも行っています。

ＤＶを受けた女性と子どもたちの状況はどうですか。

母子の関係はさまざまです。父親が母親に暴力を振るうのを目の前で見せられた子や、直接父親から虐待を受けてきた子もいます。そのことが、子どもの心に悪影響をおよぼしています。また、母親が子どもに手を上げてしまう場合もあり、子育てには多くの不安を持っています。

母子の関係や子どもの不安など、心理士がカウンセリングやプレイセラピーをとおして心のケアにあたっています。

法律の専門家の方もおられるんですか。

法律問題（離婚などの手続き）は顧問弁護士に相談します。ただし顧問弁護士が直接は担当せず、母親の出生地などの弁護士に依頼し、相手方（夫）

※1　ＤＶ（ドメスティック・バイオレンス）…ドメスティック・バイオレンスとは、「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振るわれる暴力」をいいます。また、親子間の暴力などを含めた意味で使う場合もあります。

に居場所を知られないようにしています。

離婚調停・裁判では、夫側から「親権」を求めてくる場合も多いようです。本当に子どもを求めていることもありますが、妻への嫌がらせということもあります。離婚が成立しても「面会権」が認められたことで悩む母親が多くいます。DV被害がトラウマになってしまって、元夫と顔を合わせるのが怖いのです。それほど大きな傷を持っているのです。

加害の夫側が居所を突き止めてきたことはありますか。

夫が突き止めてきたこともあります。また突き止められたかもしれない時には他の施設に移します。その時、車ですれ違ったこともあります。

ですから夫側に居場所を知られないように身近な人への連絡をしないことや、施設では仮名で生活するなど最大の配慮が必要です。

学校などの協力も不可欠ですね。

地域の小・中学校も理解と協力があり学校生活も仮名で通せるように配慮してもらっています。特に小学校では毎月連絡会を設けて、学校と施設が連携して子どもの姿を見守っています。

また施設では、母親のニーズに応えて、一・二歳児の施設内保育や学童保育も行い、宿題や生活習慣の支援をしています。

退所された方へのケアもされているんですか。

退所者のケアは支援の一つでもありますが、十分にはできていません。施設の行事に案内をしたり、機関紙を送るなどの働きかけはしています。もちろん相談や訪問してくれるのは大歓迎です。

入所する方法や費用などについても差し支えなければ教えてください。

施設の運営は市などの助成金はありますが、入所者の所属する福祉事務所からの措置費や事務費に依るものがほとんどです。入所者から運営費を徴収することはありません。

入所や退所については福祉事務所からの委託によるものですから、入所者の抱えている問題が解決されたと判断されると、施設と協議のうえ退所となります。年限は決まっていません。平均は二年ぐらいが多いようです。

「自立」の判断はどうされていますか。

「自立」とはどこからなのか。どこで判断するのかは難しい問題です。

本人が経済的に子どもを養育していけると決断できた時が自立の時なのでしょう。

最後に施設として今後の課題がありましたらお聞かせください。

国の社会福祉法人に対する見方が厳しくなっています。特に地域貢献（アウトリーチ）ということが要請されていますが、何より人権を尊重しながら入所者の問題解決に向かえるように質の高いサービスがいかにできるかが施設の大きな課題です。

本願寺ウィスタリアガーデンを訪ねて、学校や福祉事務所などの行政機関との具体的な連携や、職員の皆さんの被害者に寄り添った活動についてもお聞きしました。DVの問題について、教団や寺院の役割として何ができるのかを考えていきたいと思いました。

（女性室スタッフ　本多祐徹）

奥羽教区の取り組み

奥羽教区では、教区教化委員会社会部の中に設置された「男女共同参画推進実行委員会（以下「委員会」）」が中心になって、男女両性で形づくる教団をめざす取り組みを行っています。この委員会は、二〇〇二年度に開催された女性室公開講座をきっかけに、二〇〇三年度に設置されました。

奥羽教区教化委員会規則（二〇〇八年改正）には、「男女両性で形づくる教団を目指すための教化事業計画の立案と遂行」と謳われ、教区教化委員会の業務の一つとして位置づけられています。

現在、委員会は委員長・副委員長を含めた九人（男性四人・女性五人）で運営しています。

【活動概略】

委員会では定期的な活動として、公開学習会の開催、機関紙『ひと ひとり ひとびと』の発行、本山開催の「女性会議」への参加などを行っています。

公開学習会は、宗門内外から講師をお招きし、一般の方にも呼びかけて開催しています。事前学習会としてビデオによる研修をしたり、教区内に「儀式に関する性」を考えるためのアンケートを実施して課題に応じた取り組みを進めてきました。公開学習会をきっかけに、県や市町村などの男女共同参画推進の窓口を訪ねることもありました。

また、機関紙『ひと ひとり ひとびと』は、その年度の事業報告や委員会の主旨を伝える記事を掲載して発行しています。今年度で第9号の発行となります。

【今年度の活動】

今年度の公開学習会は二〇一五年三月一日に開催し、講師に村瀬ひろみさん（山口大学非常勤講師）を招いて「サブカルチャーが求める男女平等～男並み平等を超えて」という講題でお話しいただき、アニメの登場人物をとおして本当の意味での男女平等とは何かを考えました。

村瀬さんは講義の中で、「日本人が考える『美』には他国のそれと比べ、特異性を感じる」と言われました。それは、「ミス○○など特定・限定された女性を『美人』と考え、周りもその特定・限定された『美人』に少しでも近づこうと努力する。しかし、それは本当に『美』ということなのか。ミス○○に選ばれた女性が、美を追求し維持し続けなくてはならず〝怖い〟という声を出していた。一方、自分自身を〝美しい〟と思い、声に出す国もある」と話されました。そして、金子みすゞさんの詩「みんなちがって、みんないい」の言葉を引用し、自分自身を「一人の人間」として出遇う大切さを述べられました。

また、「オタクとは平和を強く願う人々です」と言われ、それは「オタクにとっては、自身の人生がアニメとともにある生き方をしているため、事件・事故・戦争などで大好きなアニメが見られなくなることが一番つらいことである。意味のない世界を分節し、人やモノあらゆるところに神を見つけ、至上の愛を注ぐ行為をする。そのため、ある意味多神教の世界観をもち、愛すべきモノたちは世界にあまねく存在すると感じている」と述べられました。

その他、戦争と憲法9条の問題についても話されました。参加者の声にもあるように、男女共同参画についてあらたな学びができた公開講座となりました。

この公開学習会を開催するにあたっては、会場や広報のあり方を見直し、新聞の広告欄への掲載や大学や行政機関などにもポスターやチラシを配付しました。

発足十二年を過ぎても、なかなか教区全体の課題とならず、参加する方が少数であったり、「公開」と名乗っていながら公開性に欠ける学習会になっていることは、今後の課題として取り組みたいところです。

「サブカルチャーが求める男女平等～男並みの平等を超えて」

2014年度公開学習会　開催にあたって

村瀬ひろみさんからのメッセージ

村瀬ひろみさん

女の子は弱い、守られるべき存在であると主張する人は、今では少数派になってきました。

戦後の商業アニメや人気マンガを俯瞰（ふかん）すると、ヒロイン像が大きく変わっていくのがわかります。男女平等の理念を取り入れて、女性はより強く男並みになっていきます。これは一つの男女平等の達成でしょう。

しかし、それで良いのでしょうか。戦争に組み入れられ闘争に明け暮れることが男女平等なのでしょうか。

サブカルチャーで描かれる女性像をたどりながら、「強さ」とは何か、男女平等が目指す社会のあり方とは何かを検証していきたいと思います。

参加者の声

・時代とともにアニメキャラクターが様々に変わっている。また、アニメの台詞のなかでも、男女平等についての問題発言や、時代の認識があることに驚きました。

・オタクというと、暗いイメージがあり、社会になじめない人と思っていたが、講義を聞いて個性であることを知った。

・子どもの頃から女・男と分けられていることが気づかないうちにあり、何気なく見ていたアニメの世界でも男性がつくったアニメとして女性が映し出されていたことに驚きがあった。

・男女共同参画の視点から、軍や自衛隊でもこれから女性が戦地での後方支援でなく、最前線に送られようとしていることに怖さを感じた。これは、男がやっているから女もということではないと思う。

●公開学習会

年 度	期 日	講 師（肩書きは当時）	内 容
2005年度	2006年3月24日	佐藤つじ子 （秋田県北部男女共同参画センター長）	「男女両性で形づくる教団」をめざして、私たちは何ができるか。
2006年度	2006年12月4日	望月慶子 （山陽教区宗議会議員）	「宗門における女性の位置づけ」について
2007年度	2007年12月5日	旦保立子 （東京教区宗議会議員）	「宗門における女性の位置づけ」について
2008年度	2009年3月25日	井上摩耶子 （ウィメンズカウンセリング京都所長）	セクシュアルハラスメント防止に向けて
2009年度	2010年5月7日	本多祐徹 （女性室スタッフ）	男性の視点から男女平等とは
2010年度	2011年6月3日	山内小夜子 （解放運動推進本部本部委員）	―「五障三従」の『御文』の拝読について―
2011年度	2012年5月18日	足立幸子 （大阪大学日本語日本文化研究センター非常勤講師）	―蓮如上人の御文に学ぶ―
2012年度	2013年4月19日	源　淳子 （関西大学非常勤講師）	日本の女性問題と宗教
2013年度	2014年6月3日	石蔵文信 （大阪樟蔭女子大学学芸学部教授）	男もつらいよ

大垣教区の取り組み

園田久子さんを講師に迎えて

大垣教区では、二〇〇五年から教区教化委員会の事業部による『現代の課題に学ぶ学習会』で男女共同参画の課題を学んできました。学習会の中では「女性が参加すると、それまで男性だけでやってきた気楽さがなくなり身構えてしまう」「女性参画は制度上の問題を解決すればいいのではない」など本音の部分で話し合いました。二〇〇六年度には、進むべき方向性を探るために、教化委員会のもとに男女同数で協議を行うプロジェクトを立ち上げました。

このプロジェクトに関わっていた女性が中心となって、教務所のロビーに絵本の貸し出しコーナーを設置し、現在「なむ」という絵本サークルを運営しています。「なむ」は寺院で開催される「はなまつり」や「子ども御遠忌」などに呼ばれて、絵本の読み聞かせや人形劇などを行ってきました。大垣別院の春の法要では被災地支援のバザーやカフェをオープンし、また福島の子どもたちの保養事業である「夏休み岐阜冒険旅行」にも「なむ」の女性が重要な役割を担っています。組や坊守会という組織を超えて、絵本好き・子ども好きが自然に集まって活動していて、教区の青少年教化スタッフとも協力しやすい関係を築き、今では欠かせない存在になっています。

二〇〇八年度から二〇一〇年度までは、教区内の男女二人ずつに「～私の中の男の役割・女の役割～」「～おんならしさ おとこらしさ～」などのテーマで、体験発表をしていただいてから座談会を行うという形式の学習会と、講師による学習会を開催しました。二〇一一年度からの三年間は園田久子さんを講師に迎え、長い歴史の中で無自覚のうちに刷り込まれてきた捉われについて考えようと、「女性史に学ぶ」をテーマに各年度二回、合計六回の学習会を開催することができました。そのうち一回を女性室公開講座として開催し、性別に関わりなく、ひとりひとりが認め合い、水平に出遇っていくためにはどうしたらいいのか考え、ともに解き放たれることが大切であることを学びました。

二〇一四年度からの三年間は、「男女両性で形づくるお寺をめざして～キーワードは多様性～」というテーマのもとに学習会を開催します。様々な形の寺院の運営や成り立ちを認め合う土壌を培うということで、「多様性」ということをキーワードにしました。

第一回目は、二〇一五年二月二十三日に教区同朋会館講堂にて、解放運動推進本部の山内小夜子本部委員を迎え「男の解放　女の解放　～水平へのあこがれ～」という講題で開催しました。

山内本部委員は、明治期以降、真宗大谷派が女性をどのような位置づけとしていたのか、そのことを近代史をとおして明らかにしようと提起されました。その中で、「女性が常に教えを聞く側として、教えを説く側から救済される客体としてあるならば、客体としての生を生きねばならない。そうではなくて、自身が解

山内小夜子本部委員による講義

●男女共同参画の学習会など

年 度	期 日	講 師(肩書きは当時)	内 容
2005年度	2006年3月15日	藤場芳子 (女性室スタッフ) 巨津善祐 (女性室スタッフ)	教区・組事業への女性の参画に関する学習会 大垣教区、宗派全体の女性参画に関する状況把握 他教区の事例紹介（女性の参画によって生じた効果、問題点） 活動の基盤づくりについて
2006年度	※学習会の開催はなし		方向性の模索　男女同数で協議を行うプロジェクト
2007年度	2008年4月23日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	「おとこ」と「おんな」のはじめの一歩 ※４月23日～25日に丸木俊　「いのちの花」原画展を開催
2008年度	2009年1月22日	――――	テーマ「おとこ」と「おんな」のはじめの一歩 ～私の中の男の役割・女の役割～ テーマについて４人からの発表を受け、座談会を実施。
2009年度	2009年9月2日	――――	テーマ「おとこ」と「おんな」のはじめの一歩 ～おんならしさ おとこらしさ～ テーマについて４人からの発表を受け、女性室スタッフを交え座談会を実施。
	2009年10月19日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　おとことおんなの関係史　～共にということ～
2010年度	2010年10月22日	蓑輪秀邦 (教学研究所長)	テーマ　聖教から学ぶ男と女―五障三従について―
2011年度	2011年10月3日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　女性史に学ぶ①　～なぜ女性史を学ぶのか～
	2012年5月31日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　女性史に学ぶ②　～屠（と）・沽（こ）・うかれ女（め）…～ 【女性室公開講座】
2012年度	2012年10月29日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　女性史に学ぶ③　～被差別から「賤視（せんし）」へ～
	2013年5月9日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　女性史に学ぶ④ ～近世の被差別民と遊女〈働いて生きた。それでも愛した〉～
2013年度	2013年9月20日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　女性史に学ぶ⑤ ～一人称にてのみ物書かばや。われは女（おなご）ぞ 〈明治・大正期の女性の立ち上がり〉～
	2014年6月5日	園田久子 (福岡県人権研究所理事)	テーマ　女性史に学ぶ⑥ ～戦争と「性」のもんだい〈ゆたかな性と生の回復をめざして〉～
2014年度	2015年2月23日	山内小夜子 (解放運動推進本部本部委員)	テーマ　男の解放　女の解放　～水平へのあこがれ～

放される主体としてその教えを聞いていく主人公となっていく。私が私となっていく。（中略）私が解放の主体となれるのかが問われてくる」と言われました。このことに男女の別はありません。しかし、自分の中にも客体化しているような、同じような感覚を持っていることに気づかされます。歴史を見つめることをとおして、自身の足元を確かめることを教えていただきました。

本当に細く長く地道に学習会を重ねてきましたが、講師との出遇いや言葉に背中を押された人が、ひとり、ふたりと生まれているのは大切なことだと感じています。大きな流れや、うねりにはならないかもしれませんが、そういう芽をこれからも育んでいきたいと思います。

学習会での発表の様子

かがやき

命の瀬戸際で

「もう、だめかもしれない」という思いが脳裏をよぎった。“３月11日”の揺れがようやくおさまり外へ出てみると、ブロック塀があちこちで崩れ落ち、古い木造の家が倒れ、まるで大きな爆撃でも受けたかのような光景が広がっていた。

外出中だった私の車は無事だったので、垂れ下がる電線をよけ、段差のできた橋の上を飛び越え、ようやくわが家にたどり着いた。“サバイバル”などという言葉では間に合わない、まさに“命の瀬戸際”だった。

やむことのない余震と寒さ、もう二度と夜が明けないのではないかという恐怖とともにようやく朝を迎えた。これで一息つけると思ったのもつかの間、原発事故の避難指示が出た。

携帯と毛布を車に詰め込み、一家で避難所へと向かった。

小学校の建物を使った避難所では、知り合いに会えば肩を抱き合って無事を喜んだ。そしてそれぞれが体育館や教室に自分たちのスペースを確保し、ようやく落ち着いた。

しばらくすると、それぞれの役割を決めて動いてはどうかという声があがった。

グループを決め役割を決めて、規則正しく生活していく。一見面倒な気もするが、地震でぐちゃぐちゃになった家をそのままにして逃げ、刻々と悪化していく原発事故の中で極限までの不安や恐怖と闘っていくには、とにかく助け合って体を動かしていくしかないのだと集団生活の経験のある人たちが教えてくれた。

そこで、手の空いているものは駐車場の交通整理を行い、何かあった時すぐに車が出やすいようにしておく、あるいは食料の調達をする。体力のあるものは体力のないものを背負い、食事作りの経験のあるものは準備をする。避難所に座ったままでいると足に血栓ができやすいので、看護の経験のあるものはその体操の指導を始めた。

体力のないものにも仕事はあった。津波で着の身着のまま逃げてきた人たちの話を聞き、一緒に泣き、背中をさする。

ここで私たちに必要だったのは、それまで生きてきて身につけた知識と経験のみだった。

肩書きやら何やらをふりかざしたところで、あの状況の中では何の役にも立たなかった。

私が体験した避難所生活は、３日間。この時間で何かがわかったというつもりはまったくない。

ただ、日ごろの思いとは違った時間をいっとき味わった。“命の瀬戸際”だったからだろうか。それともこうした中でこそ人間の本質は見えてくるのだろうか。

この時が何だったのかは、まだまだ整理がつかないのだけれど。

仙台教区 浜組 正西寺　小丸洋子（おまるひろこ）

ゆらぎ

鯉のぼり

北海道の春は遅い。山間の町ならば５月のゴールデンウィークまで雪が残る年もある。だからこそ５月のぽかぽか陽気には春の訪れを感じるものだ。私の住まうお寺は小学校の隣にあり、ランドセルを背負った子どもたちの行きかう姿に、平穏な日常ながら元気をもらっているような気がする。真宗的ではないとの批判もあるが、子どもたちののびやかな姿と重ねて、お寺では毎年この時期になると鯉のぼりを揚げている。

そんな中、事件は７年前に起こった。ゴールデンウィーク前、多忙を極めていた私は４月の大半を地方で過ごしていた。いわば単身赴任である。お寺は母である前坊守と妻である坊守とが小学生の２人の子どもを抱え、法務と家事に奮闘していた。５月に入り申し訳なさを感じつつ帰宅した私は、お寺の境内に揚がっている鯉のぼりを見て、驚きうろたえてしまった。鯉のぼりというのは普通、一番上にお父さん鯉、そしてお母さん、子ども鯉と揚がっているはずである。しかし、お寺の鯉のぼりはどういうわけか、お父さん鯉はいなく、一番上にお母さん鯉が、そして子ども鯉が続き悠々とたなびいていた。私は１カ月間の妻の心境を思い、恐る恐る妻の元に行き、事の経緯を尋ねた。以下はその会話である。

（私）「お父さん鯉が見当たりませんが、どうかしましたか？」

（妻）「あぁ…、ほら隣に木があるでしょう。お父さん鯉、その枝に引っかかって風に煽（あお）られてボロボロになってしまったの。だから泳がないので降ろしました。（笑）」

妻にとっては傷んでしまったお父さん鯉を降ろし、その空席を埋めるように順送りしたに過ぎない。私はなるほどと安堵しながらも、妻の言葉を反芻（はんすう）すると「あなた、夫といい父といっても働けるうちが華よ」と聞こえてきた。無論、妻の発した声ではなく私の思考である。どうやら私は自他共に人を人材として見てしまう癖があるようだ…。

翌年の４月、妻は「新しいお父さんが来たの（笑）」と言って、新品のお父さん鯉を私に見せてくれた。その鯉は良く泳ぐのだろうなと思いつつ、自分の思考の偏りにハッとした。何かをしたから、何かができたから夫、父なのではない。どうあろうと夫、父と呼ばれていたのだ。鯉のぼりは家の序列ではない。子に支えられる親、妻に支えられる夫の姿であった。

お寺ではもうすぐ、いつもの年のように鯉のぼりが揚がります。

北海道教区 南第３組 開正寺　金石潤導（かねいしじゅんどう）

『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典一五九頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしましても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあって、わたしたちが〝生きる〟ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあってこそ〝生きる〟ということがなりたっているといっても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかったり、行き違ったり、そのためにいろいろな出会いをしていながら、まわりの人を見失っているのではないでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思います。

『あいあう』『メンズあいあう』のバックナンバーについて

バックナンバーをご入用の方はお問い合わせください。最近の数刊は宗派ホームページ内「解放運動推進本部 女性室」に掲載しています。

編集後記

◆今から20年前のこと、それまで何度か会ったことのある男性から電話がかかってきた。「性差別問題は男性と女性だけではない」という内容だったと思う。身体の線の細かった彼は、もしかしたらセクシュアル・マイノリティ（性的少数者）だったのかもしれない。はっきりと言わなかったのには言わなかった理由があると思う。言わせない社会の偏見。彼の電話の真意を汲み取れなかったあの時の私。

スタッフ学習会で遠藤まめたさんの話を聞き、セクシュアル・マイノリティのパーセントは左利きのそれと同じくらいだということを知った。左利きは身近だと思えるのに、性のこととなると途端に身構えてしまうのはなぜだろう。まずは、知ることから始めたいと思う。

◆望月慶子さん（山陽教区）が女性で初めて参務に就任した。「女性初」というフレーズが付くのは、それだけ宗門の男女平等が遅れていたことを示している。「紅一点」が大きな始まりとなるよう、期待しています。

（女性室スタッフ 藤場芳子）

女性室の動き

【スタッフ派遣】

2014年

10月 2日　公開講座岡崎会場 事前スタッフ会
10月 8日　金沢教区「男女共同参画推進小委員会スタッフ学習会」に講師として参加
10月14日　公開講座熊本会場 事前スタッフ会
11月19日　高田教区「男女平等参画を考える会」学習会に講師として参加
11月19日　「女性と仏教東海ネットワーク」例会に参加
11月27日　公開講座熊本会場 事前スタッフ会
12月13日　「セクシュアルマイノリティの人権」公開講座受講
12月15日　公開講座岡崎会場 事前スタッフ会

2015年

1月20日　公開講座熊本会場 事前スタッフ会
1月29日　公開講座岡崎会場 事前スタッフ会
2月 6日　大阪教区「女性住職の集い」にアドバイザーとして参加
2月19日　公開講座岡崎会場 事前スタッフ会
2月23日　公開講座熊本会場 事前学習会
3月 4日　公開講座岡崎会場 事前スタッフ会

【女性室スタッフ学習会】
2015年1月9日　講師：遠藤まめたさん

【男女両性で形づくる教団をめざす協議会】
2015年3月13日　会場：宗務所会議室　提言：見義悦子さん

表紙絵：上田 文

今回の表紙は、レインボーフラッグの６色をベースにしました。

このレインボーフラッグは、同性愛者であることを公表したハーヴェイ・ミルクが1978年にサンフランシスコ市会議員に当選したことを機に作られました。虹の色で、性のあり方の多様性を表しています。（彼は、この後すぐに暗殺されました。）日本でも、ようやく同性カップルの権利が認められる方向へ動き出しているようです。

お知らせ

【第15回女性会議】
期　間：2015年4月20～21日
会　場：真宗本廟研修道場
講　師：大橋由香子さん（フリーライター・母子保健研修センター助産師学校非常勤講師）
テーマ：一人に立つ　～現代を生きる女たち～

【公開講座】
2015年5月31日　熊本会場
会　場：東本願寺熊本会館（熊本教務所）
講　師：園田久子さん（福岡県人権研究所理事・九州大谷短期大学非常勤講師等）
テーマ：今のままで何が悪い－あたりまえを問う－

2015年6月25日　岡崎会場
会　場：岡崎教区会館（岡崎教務所）２階大ホール
講　師：安冨 歩さん（東京大学東洋文化研究所教授）
テーマ：私の「役割」って何だろう？
―日々、生きづらさを感じていませんか？―

女性室広報誌 あいあう

女性室広報誌『あいあう』第 26 号

発　行　2015 年 4 月 10 日
発行人　木越　渉
発行所　真宗大谷派宗務所
解放運動推進本部女性室
〒600-8505
京都市下京区烏丸通七条上ル
TEL 075-371-9247
FAX 075-371-9224